

京都女子大学図書館吉澤文庫所蔵『相伝秘要蜜勘抄』翻刻

中 前 正 志
柴 田 清 子

京都女子大学図書館吉澤文庫に所蔵される『相伝秘要蜜勘抄』(YK911.232/K)は、江戸前期頃写の袋綴一冊(寛永以前 始め?)と鉛筆書きした紙片挿入)。料紙は楮紙。縦二七・八×横二二・三cmの渋引表紙の左上に、「相伝秘要密勘抄 離別初恋四」(打付書)。前遊紙一丁、後遊紙二丁(うち一丁は後表紙見返し紙の剥がれたもの)で、前後表紙とそれら前後遊紙以外、全四十八丁。每半丁に八〜十一行。墨付第一丁表の右上端に蔵書印「日野庫」(陽刻朱長方印、縦五・八×横一・九cm)が存する。そして、同じ墨付第一丁表の冒頭に、右上の一部には右蔵書印が上から重ねて捺されているが、「古今和詠集卷第八 相伝秘要蜜勘抄／離別哥」とあり、以下、各卷冒頭に同様の形で、

- | | | |
|-----------|--------------|-------------|
| 古今和詠集卷第九 | 相伝秘要蜜勘抄／鞆旅哥 | (5才 5〜6行目) |
| 古今和詠集卷第十 | 相伝秘要蜜勘抄／物の名哥 | (13ウ 4〜5行目) |
| 古今和詠集卷第十一 | 相伝秘要蜜勘抄／恋哥一 | (17ウ 7〜8行目) |
| 古今和歌集卷第十二 | 相伝秘要蜜勘抄／恋哥二 | (32ウ 5〜6行目) |
| 古今和歌集卷第十三 | 相伝秘要蜜勘抄／恋哥三 | (36ウ 6〜7行目) |

と見える。先引外題箇所にも「離別恋四」とあつたように、巻八離別から巻十四恋四までのみの零本である。本来は数冊から成つていたのであろう。全歌注ではなく、施注対象の古今集歌を、基本的には一つ書きの形で全部または一部掲げたうえで、注釈本文を掲載する。中に三箇所、「当道の説には……」(16ウ〜17オ)「当家は……」(34才)「当流には……」(47ウ)という記事を含む。奥書類は見えない。なお、先引外題が「相伝秘要蜜勘抄」とするのに対して、右に列挙したところはいずれも「相伝秘要蜜勘抄」とするので、本伝本の書名としては、後者の方をとるべきなのだろう。

本書『相伝秘要蜜勘抄』を最初に取り上げたのは、片桐洋一氏「京都女子大学本相伝秘要蜜勘抄」と『東山御文庫本古今集聞書』一付、「中院本古今序抄」再説——(『中世古今集注釈書解題』五、赤尾照文堂、昭和六十一年一月)である。「大雑把に言えば、『毘沙門堂本古今集注』に類する注釈書」で、「初雁文庫本古今和歌集注』『毘沙門堂本古今集注』と同趣の説を、さらにくわしく、さらにサーピス精神をこめてに述べているところに特色があると思うのである」『毘沙門堂本古今集注』の類と同趣の傾向を持ちながらも、完全に一致するわけでは必ずしもなく、いわゆる独自性をも持っている」などと説かれている。その片桐論考の直後の青木賜鶴子氏・生澤喜美恵氏・鳥井千佳子氏「古今和歌集灌頂口伝(下)——解題・本文・注釈——」(『女子大文学』国文篇37、昭和六十一年三月)は、『古今和歌集灌頂口伝』に注釈を施すなかで、「京都女子大学本『相伝秘要蜜勘抄』は、『毘沙門堂本注』と同種のものであるが、『清和天皇貞観十八年に御出家あり。水尾に籠玉ておこなひ給ひしかば、陽成位に付て代を納メ行玉フ』とし、『船にのれ』について「其御代に成りてつきたてまつりて世を渡れと云」と、これら(『冷泉家流伊勢物語抄』等……引用者注)と同様の説をあげながらも、すぐ後では本書と共通の『日も暮ぬと云は、清和のかくれ給ふと云』という説を述べている。(中略)次の『白き鳥のはしと足と赤き』についても、『冷泉家流伊勢物語抄』と密接な関わりがある。(中略)『足赤し』を『紅

梅のさしぬき』とする点は異なるが、それ以外はほとんど同一といつてよい。この点『毘沙門堂本注』は、『紅精ト云テ赤ハカマヲメシタルナリ』とし、前述した京都女子大学本『相伝秘要蜜勘抄』も『紅精の御袴をめすを云』としていて、より近い」(96頁)と、『相伝秘要蜜勘抄』の第十丁裏および第十一丁表の本文(片桐論考に引載されてもいる)を参照している。片桐論考以後に同書本文を参照した論考として、最も早いものである。その後、斯道文庫書誌叢刊之七『古今集注釈書伝本書目』(勉誠出版、平成十九年二月)が、「毘沙門堂本古今集注『京都女子大本』」として本書を著録するとともに、続いて「毘沙門堂本古今集注『京都女子大本』・古今和歌灌頂巻」として宮内庁書陵部所蔵安政元年鷹司政通書写本を挙げ、「京都女子大学蔵『古今和詞集相傳秘要蜜勘抄』(YK911.232/K、毘沙門堂古今集注)と同じ」と注した。そして最近には、舟見一哉氏「『毘沙門堂本古今集注』系古注の伝本整理」(平成二十七年六月二十日中古文学会関西西部会第四十回例会)が、「『毘沙門堂本古今集注』と同種とされる注釈書の伝本を整理し、毘沙門堂旧蔵本(現在は国文学研究資料館蔵)を再定位する」(『中古文学会関西西部会会報』14、平成二十八年三月)なかで、本書についても右の書陵部蔵鷹司本などと共に位置付け、毘沙門堂旧蔵本との影響関係が想定し難いことなどを指摘している。

以上のような従来の研究内容に対して何らかの新たな知見を加えることは、門外漢の稿者らのよくするところではない。よって、本拙稿においては翻刻のみに専心することとした。

なお、本拙稿は、文学研究科国文学専攻博士前期課程の平成二十四年度授業「中世文学演習ⅡA」において、中前と受講生の柴田が『相伝秘要蜜勘抄』の翻刻作業を行ったのに基づいている。国文学研究資料館にマイクロフィルムが所蔵されていて(マイクロ請求記号242-64-3)全文がすでに広く公開されている状況下にあつて、翻刻を公刊する意味がどれほどあるのかと躊躇された面もあるが、授業での作業の一つの報告として大学院紀要に掲載させて頂くこととした次第である。授業での検討を基に柴田が翻刻本文の礎稿を作成して中前と協議点検、前文は中前が執筆して柴田が確

認した。その他、種々協議して成稿した。判読できていない箇所以外にも誤読や不備が少なくないのでと危惧される
ところであつて、後日の補訂を期したい。大方のご批正をお願いする次第である。

【凡例】

- ・ 基本的には通行の字体に改めるとともに、私に句読点などを施した。
- ・ 判読し得なかつた箇所は□とし、判読に際して確信を持てなかつた文字については（？）と傍記した。また、誤写等の疑われる箇所には（ママ）と傍記したが、より具体的な注記を（ ）内に加えた場合もある。
- ・ 見せ消ちは元の本文も示したが、塗抹して訂正してある場合などは、そのことを特に断わることなく訂正された本文のみ載せた。
- ・ 随所に見える「朱云」「朱云」「朱言」（片桐論考参照）はゴシック体で示した。
- ・ 掲出された各古今集歌あるいはその一部の上方に、『新編国歌大観』に基づいて、その歌の番号を掲げた。また、歌自体は全く掲出されないが、同歌についての記事が見られる場合は、その記事の上方に括弧に入れて歌番号を掲げた。
- ・ 掲出歌に関する記事が、掲出箇所の前後でなく、そこから離れた位置に存する場合、その記事の冒頭に歌番号を（ ）に入れて傍記した。
- ・ 半丁毎の末尾に「（一オ）などと記すとともに、それら以外の各行末には／を置いた。
- ・ 見やすさを考慮して、一つ書きの「二」の下に一字分の空白を設け、和歌を掲げることの多い「二」以下の一行はそのまま一行として、次行以下の記事は「一」から二字下げた形で追込みにして、それぞれ載せた。

- 紀のむねさたは、貫之か舎弟也。人の家と云は、貫之か遠江にすみし時につくりたる家なり。えそしらぬよし心みに(マ)とよめる也。女は、貫之か娘也、助内侍也。姪に忍通し也。／
- 一 一 えそしらぬいま心見よいのちあらは我心(マ)わする、人やとはぬと(2オ)／
- 一 一 別てふことは色にもあらなくに心にしみてわひしかるらむ／
- 一 人をわかれけるとは、平の蘆名(ウ)かむすめニ忍てかよひけるか、／此女おほえのみつよしか妻に成り、遠江へ下りけるニつかはず。／
- 一 一 しら雲のこなたかなたに立わかれ心をぬさとくたく旅哉／
- 一 良嶺のひておる哥也(マ)。みちのくへまかりける人によみて／つかはず(しけるの歌か)そのは、寛平三年七月廿日ニ紀有実か下る也。／
- 一 一 かへる山なにそはありであるかひはきてもとまらぬ名ニこそ有けれ／
- 一 藤原の宗行か哥也。平兼輔となるもあり。みつねと(2ウ)あるもあり。業平とあるもあり。とにかくに宗行か哥也。／
- 一 一 もろともに鳴てと、めよ蜚秋のわかれはおしくやはあらぬ／
- 一 藤原の兼輔茂か哥。于時従五位右衛門佐之後参議たり／延喜十七年四位成。利基か三男。六十二首入る也。／
- 一 一 秋きりの友に立出て別れなははれぬ思ひに恋やわたらん／
- 一 平のもとのりか哥也。三河守中興か一男也。／
- 一 一 人やりのみちならなくにおほかたはいき(マ)こしといひていさかゑりなん／
- 一 此哥源のさねか哥也。于時右近衛少将従五位上(3オ)。信の守。参儀(マ)左衛門督舒二男。昌泰三年ニ薨ス。／

388

386

385

382

(380) 379

381

377

- 387 一 いのちたに心になふ物ならはなにかわかれのかなしからまし／
- 391 一 しろめか哥。此人は江口の女也。ならひなき美女也。さかの御思人也。／
- 391 一 君か行こしの白山しらねとも雪のまに／あとはたつねん／
作者藤原のかねすけ。雪のまに／はすむ也。（任の誤か） 万云、／みよしの、花のまに／尋ぬれは思かけさる
嶺のしら雲／上中下の故三吉野と云也。／
- 393 一 わかれせは山マヤの桜にまかせてむとめんマヤとめしは花のまに／（3ウ）
- 393 一 幽仙法しか哥也。此人は天台の座主也。慈覚御弟子也。／右近将監宗道か一男也。贈太政大臣継陰の孫也。／
- 394 一 山風に桜ふきまきみたれなむ花のまきれに立とまるへく／
- 396 一 遍昭か哥。大原の花の許にてよめる哥也。／
- 396 一 あかすしてわかる、涙たきにそふ水まざるとやしもは見るらむ／
兼芸は幽仙の弟子也。伊勢守藤原古キか子也。哥四首入。／
- 400 一 あかすしてわかる、袖の白玉を君か形見と褻てそゆく／
- 402 一 かさりなく思ふ涙にそほちぬる袖はかわかしあわん日までに」(4オ)
- 402 一 あかすしての哥は、業平宇佐の勅使ニくたりし時、二条／后にみて給る哥也。かきくらしの哥は、菅原の淳茂／よみて、助内侍につかはすかへし。男なる故ニよりて也。又、／ぬれ衣の事は、かきくらしことはふらなむ春雨ニぬれ／きぬきせて君をと、めん 是は松浦上人の御時よりおこる事也。／娘かうたなり。万云、
ぬきするその名はかりのぬれ衣は
なまきわかれのなみたなりけり／
- 403 一 しゐて行人をと、めん桜花いつれを道とまとふまてなれマヤ／

404 一 伊勢かむすめ、中務か歌也。父はあつよしの親王なり。」(4ウ)
 一 むすふ手のしづくに濁る山の井のあかても人にわかれぬる哉／

405 一 しかの山こえの石井をむすふとてよむ。つらゆき／
 一 下のおひのみちはかた／＼わかるとも行めぐりてもあはぬとそおもふ／
 一 みちにあへる車に物をいひ次て、文をまいらせたる時、ともりのり。／

古今和詞集卷第九 相伝秘要蜜勘抄／

鞆旅哥 もろこしにて月を見てよみける／

406 一 天の原ふりさけみれはかすかなるみかさの山に出し月かも／

ふりさけは、ふりあをいてみる心也。此哥は、むかし仲丸(5オ)もろこしに物ならわしにつかはされたる時に、あまた／＼年をへて、えかゑりまうてこさりけるを、この国より／＼又、つかひまかりいたりけるに、たくひてまうてきなん／＼とていたりけるに、公いしうといふ所のうみへにて、／＼かの国の人、むまのはなむけしける。夜に成りて、月の／＼とおもしろくさし出たりけるを見てよめるとなん／＼かたりつたふる也。かの仲丸は、光仁天皇の御時、学文也。／

407 一 わたの原やそしまかけて漕出ぬと人にはつけよ海人の釣船(5ウ)

おきの国になかされける時に、舟にのりていてたるとて、／＼京なる人のもとにつかわしける。此哥、小野篁か哥也。／＼此人は、嵯峨天皇の御時、大内大極殿無悪善とそ／＼書たりける落書よみたるによりて、無悪善(マヤ)なかき／＼れし也。文選云、仁義礼智信の五常は世人の行所也。／＼非之悪謂(マヤ)へり。是を以て、さかなくていよしとよむ。落／＼書はよむ所科ありとて、なかされ給ふ。其後、なりひらか／＼奏聞(マヤ)依て、めしかへされし也。

一 或義には、姫宮をおかしたる」(6才) 科になかさるともいへり。七月はかり也。／

一 都いて、けふみかの原いつみ川かわ風さむみ衣かせやま／

一 ほのくどあかしの浦の朝きりに鳴かくれ行舟おしそ思ふ／

神亀二年九月十日^ニ伊勢大神宮へ御幸をなさる、／事ありしに、聖武あそはされし哥也。ほのくど^ノの哥は、
 ／おもては旅の哥、是は風の哥也。天武天皇東宮ノ／太子高市王子十九才にて卒行ありき也。ほのくど^ノとい
 ふ^ニ四の義あり。風・若・寿・明、天地、此四の義は、今の哥は寿^ヲ」(6ウ) ほのくど^ノといへり。明石の
 浦は、娑婆のあきらかなるを云也。／朝きりは、死して冥途^ニ途を云也。嶋かくれば、此秋津し／まをかく
 れて行を云。又、魔におかされ行ともあるへきか。船／は国王也。太公望の^{マコト}主政を賢^{カシク}して悉直、恵波流^ル
 外^カ／千万^ニ壽、貴賤渡^レ世事能妙也、故号^ニ船^ト筏^ト誰不敬。／貞觀政要云、君者如^シ船。臣者如^レ水。水能渡^レ船^ヲ
 還^マ／船^ト右在^テ臣船乗^テ船覆^テ同水の徳也。／

一 から衣きつ、馴にし妻しあればはるくきぬる^ヲ旅をしそ思ふ」(7才)

あつまのかたへ、友とする人ひとりふたりいさなひていきけり。／みかわの国やつはしといふ所にいたれり
 けるに、その河の／ほとりに、かきつはたいとおもしろくさけりけるを見て、／木のかけにおりぬて、かき
 つはたと云いつもしを句の／かしらにすへて、旅の心をよむ也。在原業平朝臣の／哥也。朱云、あつまのか
 たといふは、まことにくたるにはあらず。／忠仁公のひかし山の家にあつけらる、をいふ也。友す／る人と
 も、なりひらの子なり。友たりしは、有常・定文、」(7ウ) 同心して后をはぬすみたりとて、おなしくあ
 つけらる、也。／三河と云也、実にわたる川にはあらず。三水なり。水をた／とへて為^レ心。仏法には、真
 如の法水と云也。非^レ伝^ニには、／煩惱の三毒と云。水は、器^ニ随^ヒかなふ物なり。されは、／形をあらはす也。

一 一名にしおは、いさことはむ都鳥我思ふ人はありやなしやと／

心は、ものによりて変する故_ニたとへて云、心を水と云。苦也。三心の苦を三河といふなり。／二条后・染殿后・四条后、此三人に別る、を歎く心を云也。／八橋と云は、八人を思ひ渡るを云也。其しないかん。三条町・（8才）伊勢・小野小町・有常かむすめ・初草の女中将か妹・／定文むすめ・染殿后内侍・順子五条ノ后也。此八人也。かきつ／はたは、人の形見（ママ）よみならばせりける物なれば也。そのうへ前／裁に杜若のありけるなり。後撰集（いひその、宿の杜若、思ひわたるゝそかたみ成けれ）／貞助か哥。此哥の心は、むかし、天武天皇御子新田／親王、女恋てあひて後にかよひ給わぬ心なりしに、女／うらみあまりてしかは、是を形見ニせよとて杜若を／やりければ、それを植て見る。それを形見と云なり。おり居（8ウ）てとは云、業平雲の上ニ侍しか、忠仁公の許ニあつけられし／かは、かく云也。此句、おりの本也。／

むさしの国としもつふさの国とのあわむにある川をは、す／みた川と云也。かの河のほとりにいたりて、宮このいと恋／しうおほえければ、しはし川のほとりニおり居て思ひやれば、／かきりなくとをくも来（ママ）しけるかなと思ひわひて詠／をるに、わたしもり、はや舟ニのれ日も暮ぬといひ（9才）ければ、舟にのりてわたらんとするに、みな人、物わ／ひしくて、京におもふ人なくしもあらず。さるおりに、／しろき鳥のはしとあしとあかきか、河のほとりに／きゐてあそひけり。京にはみえぬ鳥なりければ、／みな人みしらす。渡し守に、是は何鳥そととひけ／れは、これなむ都鳥といひけるをき、て、さても／都鳥とはとて、此哥をよむ也。朱云、角田川は勿論、む／さし・しもふさの国の中をなかる、川也。長良郷（ママ）（9ウ）于時武藏守、国経卿于時下経守也。津国吹田川の南／北ニ二人の家あり。武藏・下総と云也。すひ田川をすみ／田川と云。いとみとの五音のひ、き通したる故也。ほとりに／居たるとは、かの人の家に行て遊ぶを云也。かきりなく

／かきりなくとをく来しければ、きさきたちの中の／とをき恋路を云也。渡守とは関白也。王は舟にたとへたれば、／関白を渡守と云也。其時の関白は昭宣公也。巨政伝云、／三公之侍臣は護^テ君位^ヲ不^レ失、如下渡守倫引船不^レ失。」(10オ) 清和天皇、貞観十八年^ニ御出家あり、水尾に籠玉て／おこなひ給ひしかは、陽成位^ニ付て代を納^リ行玉。此時^ニ昭宣公、業平をよひて、清和こそ勅勘ありつれ、など／陽成はいか、おほしめし捨給はんとて、其御代に成りて／つきたてまつりて世を渡れと云。渡し守、是也。舟と云／へり。日も暮ぬと云は、清和かくれ給ふと云。みな人物さび／しくと云は、中将来て陽成^ニむかひたてまつりてか／しこまる事、わひしくかたはらいたきを云也。京^ニおもふ人」(10ウ) なきにしもあらずとは、二条の後、下男にてなかされたりしか、／御子陽成御門を云也。鳥とは王を云。王は、政一天にかけりて／万人をめくむ故に、鳥と云。文集^ニ云、鳥君ノ政、翼翔^ニ四ノ海^ニ云。しろきと云は、王、銀盧^ヲなをしをめす故也。髻／あかしとは、御臂のあかきを云也。紅精の御袴をめすを／あしの赤と云也。伊勢物語にはしきの大なる鳥と謂へり。／漢高祖司宜公ト云、かほ八寸ありし如か。陽成天ノ皇も面の八寸ましますしかは、司宜の大きさと云也。」(11オ) 司宜公と云は、軍^ニかちて百官のつかさをよろしくす故か。／司宜公と書て、つかさよろしとよむ也。京にはみえぬ鳥と／云也、業平の京にありしには、王土にはみえずと云へり。みな／人々の見しらすとは、定文、有常等も始てみたて／まつるなるへし。わたし守に問ふとは、今位に着給ふかと／いふ也。委敷は物語に注するのみ。／

一 きたへ行雁ぞ鳴なるつれてこし数はたらてそかへるへらなる／

此哥は、ある人、おとこ女もろとも^ニ人のくにへまかりける、」(11ウ) おとこまかりいたりて、すなはち身まかりにければ、女ひとり／京へかへりけるみちに、帰るかりの鳴けるをき、てよめる。／朱云、伊春^ノ甲

- 413 一 斐守にてくたる時、清原房則かむすめを／具して行たりしかは、茲春国にて死してんけり。妻ひ／とりか京へすこ／とのほるとてよむ也。茲春かま、舅／有常か代官にくたりける也。房は(ママ)大伴の良房か子也。／
- 一 山かくす春の霞そうらめしきいづれ都のさかひ成らん／
- 此哥は、紀よしもちあつまへくたる。仲文かむすめをつれて」(12才)くたりてのほるとて、三河国にてしはし逗留するなり。／その時、京へまうてくるとて、関山のわたりにてよめり。／まことには、壬生よしなりか女也。／
- 414 一 きえはつる時しなけれは越路なる白山のなは雪にそ有ける／
- みつねかゑちせんへ国のつかさ給りてまかりける時よむ。／
- 417 一 ゆふつくよおほつかなきを玉匣ふたみのうらはあけてこそみめ／
- かねすけ、但馬のくにの湯へまかりける時ふたみの／うらと云所にとまりて、ゆふさりのかれいひたうへけるに、」(12ウ)友に有ける人々の哥よみける時よむ也。／
- 418 一 かり暮したなはたつめにやとからんあまの河原に我はきにけり／
- これたかのみこのともにかりにまかりける時に、あまの川と／云所に河のほとりにゐて、酒などのみけるつゐてに、／在原なりひら川原にかりしたる心をよむ。／
- 419 一 ひととせにひとたひきます君までは宿かす人もあらしとぞ思ふ／
- みこは、此哥を返しよみつ、かへしえせずなりにければ、／ともに侍りて紀ありつねかつかまつるなり。此人は、紀の」(13才)名虎か一男。承和元年(7)恭す。／
- 421 一 たむけにはつ、りの袖もきるへきにもみちにあける神やかへらん(ママ)／

たむけと云は、法しのけさなり。是は助内侍か哥也。／

古今和謠集卷第十 相伝秘要蜜勘抄／

物の名哥 ふちはらのとしゆきの朝臣／

422 一心から花のしづくにそほちつ、うくひすとのみ鳥の鳴らむ／

423 一くへきほとときすきぬれや待わひて哥、助内侍也。／

424 一浪のうつせみれは玉そみたれけるひろは、袖にはかなからむや(13ウ)

425 一あり原の重春か哥也。壬生忠峯、返しせし也。／

(マ) たもとよりはなれて玉そつ、まめや是なんそれとうつせみんかし／

426 一あなうめにつねなるへくもみえぬ哉恋しかるへきかはにほひつ、／

此哥は、ゑんきの御むすめ深子の親王御哥也。うめ。(三)

427 一かつけとも浪のなかにさくられて風吹ことにうきしつむ玉／

つらゆき、仙洞へまいりて、かはさくらをつかまつれとて。／

431 一みよし野、吉野の瀧にうかひ出るあわをかたまのきゆる／

とみつらん 在原是としの朝臣よめり。をかたまの木。(14オ)

432 一秋はきぬ今やまかきのきりくす夜なくなかん風のさむさに／

やまかきの木を、七条中宮御哥也。／

435 一ちりぬれはのちはあくたになる花を思ひしらすもまとふてふ哉／

くたにをへんせうよむ。くたに、葉のまろくとしてちいさく／て、深山などに苔のうへなどにはへる草也。

- 世には流布／せず、たえ苔と云也。／
- 440 一 秋ちかう野は成りにける白露のをける草葉も色かわりつ、／
 き、やうの花の事、仙洞にてともりつかまつる哥也。」(14ウ)
- 449 一 うは玉の夢になにかわなくさまんうつ、にたにもあかぬ心を／
 川な草。ふかやふか哥也。雲林院にてよむ也。／
- 450 一 花の色はたゝひとさかりこけれともかへすゝそ露は染ける／
 さかりこけ。たかむこのとしはるは、めされてよませたる。／あをみとりのやうなる草也。又、こけの類也。
 大嘗会に／いる物なり。塩衣と云て、ほやとよめり。／
- 456 一 波の音のけさからことにきこゆるは春のしらへやあしたまるらん／
 457 一 かちにあたる波のしつくを春なれはいかゝさきちる花と見さらん」(15オ)
- 此哥ともは、安倍清行か備中へくたりてのほるとて、備前／の牛まると云濱のわたりに、からことのはまと
 いふ／所あり。よみて京にて兼覧親王の許へまいりて、此／よし申てければ、又、いかなりける名所かと問
 せ給へは、／いかゝささと云所もありしと申せは、しはし案し給ひ／て、やかてあそはず。いかゝさきなり。／
- 454 一 いさゝめに時まつまにそひはへぬる心はせを人は人にみえつ、／
 さゝまつ、ひは、はせをは也。紀めのとよめり。いさゝめは、いさゝかなり。」(15ウ)
- 464 一 花ことにあかすちらしし風なれはいくそはくわらん／
 はくはからとよめり。しけあきらの親王の御哥也。／
- 441 一 ふりはへていさ古郷の花みんとこしをにほひそうつるひにけり／

- 1094 443 442 460 (445)
- 一 貫之か家人、笠家光か哥也。追て申すなり。／いさ、めに時まつとは、いさ、めとはかりそめなるを云。又、いさ、／みとも云也。朱云、から琴（456）と云所は伊賀国にもあるよし／申侍なり。かの所に夜ことに琴を人の引けんは、あやしみ／てみるほとに、うつくしき女のから琴をひきけるか、人の（16才）近付を見て、水の中へ入てうせぬ。水神也。琴をとり／おとし残して帰る（帰るの奴）は帰りのか。奴、神とあかめ琴引の山と云。なはり／の郡にあり。物の名に、をかたまの木の名と見ゆ。され／ともく、近代に人しらす。内裏にもふかき秘事にめさる、也。／谷ふかみたつをかたまの木吾なれば思ふ心の朽てやみぬる／もし是はいふかしく、さ衣（マヤ）にあり。口伝、これにあり。／
- 一 めとにけつりて花させりける 簪（マヤ）と云、物の名の草の形也。／
- 朱云、めとにおほくの義ありと云へりけれ共、当道の説（16ウ）には、めんとを二字中を略してめと、云也。其めんとは何／者ぞ。不審。口伝に申へし。百和香（464）と云は、かくはしきくさ／の花にてあわせたる香なり。或はゆりなり。又はたき物也。／川名草、池などに青緑のことくにあり。／
- 一 うは玉のわかくろかみやかはるらん鏡のかけにふれる白雪／
- かみや川。名所、伊勢国にあり。貫之まいりてよむ。／
- 一 我やとのはなふみちらす鳥うたん野はなければやく、にしもくる／
- りうたんの花を中納言朝忠よみし也。りんたう也。（17才）
- 一 ありと見て頼むそかたきうつせみの世をはなしとや思ひなしてん／
- おはなを在原の元方よめり。／
- 一 めさしぬらすなと云は、めさしは目をさしきりてとるわらは／

へをめさしと云也。竹河の哥に、
 一 たけかはの橋のつめなるやはなそのにわれをはわれく／
 めさしおほく^(マヤ)てト云。めのわらはへト云モ有ぬへし。／

古今和謠集卷第十一 相伝秘要蜜勘抄／

恋哥一 題しらす よみ人しらす^(マヤ) (17ウ)

一 郭公鳴やさ月のあやめ草あやめもしらす^(マヤ)恋もする哉／

あやめもしらぬは、恋すれはこゝろほれくとしてあやのめもしらぬ也。又、きぬの名などの事也。されは、夕暮^ニ／物の見えぬを^ハあやめもわかぬなどふるき物に書たる也。／史記云、^(マヤ)旅宿はみちをおほつかなく行と云へり。されは／おほつかなき也。しやうふをあやめといふなり。天竺の詞也。／朱云、心に似るへき哥よみも是をしらぬ也。ことにく／ならはてはしるへからず。むかし、天竺^ニに女ありけり。聖^{セイ} (18才) 太王^ト申す人あり。その人の思人あり。菖蒲冠^{シヤウポウ}をしたり／けり。うはなりのきさきをねたみて、思ひ死にうせたりける。／くちなわとなれり。そのくちなわ、あやめと云大蛇になる。／しかれとも、なかさ三尺にあまらず。毒蛇にてちいさければ、／友の大蛇や、もすれはのみて腹をさしぬかれて破り／出れば、おほくの大蛇ころされおわんぬ。その、ちは、大蛇とも／心をあわせてかれに食をあたへさりしかは、うへてふし／まろひもひれふしかなしむ。その、ち、かの聖太王に付て (18ウ) 御悩をなす。はかせうらなひ出して、さらは食を得させよ／とて、飯を海へ入させらるれば、それをも蛇ともとりくらい／て、今のあやめ蛇にあたへす。猶きさきに付て物くるはしく／くちはしり給へは、その時飯をちまきに拵て海へ／入られしかは、余の蛇はくたんのあやめかとおもひ、ちまき／をくらはされは、是を心やすくあやめは食する也。それ／より

475

一 世中はかくこそ有けれ吹風のめにみぬ人も恋しかりける／＼
此哥、延喜第七宮深子内親王を貫之うけ給り及て／恋たてまつる也。内裏に七条の宮とは、此人の事也。／

472

一 しら波の跡なきかたに行舟も風そたよりのしるへなりける／
此哥は、山階の右大将藤原経行の娘を恋て、藤原／＼の勝臣かつかはす哥也。返しあり。しら波のあとなき恋と／聞からに見ゆるなるへきかたはゆるさし」(20ウ)

471

一 吉野川いは浪たかく行水のはやくそ人を思ひそめてし／
よし野川はことにはやき川なれば、はやき事をよそへて／よむなり。心は、貫之、仙洞に周防の内侍とて美人有、御所^書給り、はしめ洞庭^心までまいるに御盃給るとて、」(20オ) 此女をいたされたり。やかて続て送る。吉野川^心あなち^心／かきるましきなり。よの川もいくらははやき川はあるへし。／しかれとも、いもせ山の中をなかる、水なれや、^心はやくも落／あへかしと、いもせの中よりなかるれはとなり。／
下第一の美人なり。／延喜のおもひ人也。わりなくも守平思ひ給ふ也。／
哥は、橘の長盛かむすめヲ／恋て、延喜第六の御子守平親王のあそはされたり／とするす。此むすめは、天

ちまきははしまりたり。わか朝の菖蒲草を／あやめと云事は、此虵を表したる也。此虵人に付て崇る」(19オ)を、靈魂のまつることにて、五月五日はいわふなり。しかれば、／恋するものはみな虵ほととの事にこそならずとも、終に／はくちなわに成る也。郭公鳴や五月とは、た、五月といはん／ためなれば、郭公^心子細なしあやめもしらぬといはん為也。／恋する人、をのれか身の虵になる事をもいはず、た、／こひをするかなと云心也。あやめもしらすとは、かゝるおそ／ろしき毒虵にさへ成る人もあり。あまりに恋をせは、我も／人もあやめ程の虵にや成らんと云心也。此理たやすくしりかたし。」(19ウ) かゝるふかき心、哥には有也。此

474

一 立かへりあわれとそおもふこそ^(マ)にても人に心をおきつ白波

人に心をおきつしら波とは、心をかけたりと云也。元方哥。／

476

一 見すもあらず見もせぬ人の恋しくはあやなくけふや詠くらさん

右近のむまの日おりの日、むかひにたてたてたりける／車の下すたれより、女のかほのほかにみえければ、(21オ)よむてつかわしける。なりひらか哥也。／朱云、右近の馬場のひおりの日と云は、北野の祭と云り。／おなしくは北野は菅承相の聖廟なり。かの祭と云、／不審也。承相は延喜の時の人也。業平は清

和の時の人ぞ。／時代ことくく相違して、つふさならず。日おりとは、内侍所／の祭也。内侍所は日神也。

此祭は日不定。此御神を右近の／陣くたしてまつるを、日をりと云也。むかひにたてる車の／女は、西

三条の左大臣良相の卿の御むすめ染殿の(21ウ)内侍、是なり。後業平か妻となる、滋春か母なる。あや

／なくは、無益也。その、ち事はて、内侍方より返し哥、／

477

一 しるしらぬなにかあやなくわきていはむ思ひのみこそしるへ成けれ

一 かすか野の雪まをわけておい出くる草のはつかにみえし君かわ

かすかのまつりにまかれりける時、物みに出たりける／女のもとに、家を尋てつかはせりける、忠岑哥。

／春日の祭とは、二月の初午の日也。勅使隨身のたつ／まつりなり。女は、貫之むすめ、すけの内侍か事

なり。(22オ)

480

一 たよりにもあらぬ思ひのあやしきは心をつくるなりけり

おほうちの御哥合にもとかたつかまつる也。／

483

一 片糸をこなたかなたに捻かけてあわすは何を玉の緒にせん

484

一 此哥、染殿の后を思ひかけて、仁和第六王子／よみ給へる哥也。文徳天王の御舎第也。夕暮は雲のはたてに物そ思ふあまつ空なる人をこふとて／

雲のはたてとは、二儀あり。ひとつには、蜘蛛と云むしの幡／のやうにいとをすかくを云也。今の哥は、雲のみたれて幡（22ウ）をたれたるやうなり。物ををるはたものにはあらず。仏／所にかけられしはたのことく雲のたなひきを云。／此哥は、四条の后を恋て茲春（あき）かよめり。后は行平の娘也。又云、雲のはたてにとは、雲の日の入ぬる山にひか／りてすち／と立たるやうに見ゆる、雲のはたての手成ると云り。／

485

一 かりこもの哥は、貞元親王のあそはされたる也／

486

一 つれもなき人をやねたくしら露のおくとはなけきぬとは忍はん／

487

一 此哥、七条の宮哥也。仲文をおほしてあそはす。（23オ）

487

一 ちはやふるかものやしろのゆふたすきひと日も君をかけぬ日はなし／

ゆふたすきと云は、してつけたる縄なり。かけてと云枕言也。／かけ帯のことくと云へり。春かの神主の歌。中宮大夫良門と云也。／

488

一 我恋はむなしき空にみちぬらし思ひやれとも行かたもなし／

489

一 三条右大臣良忠のむすめを恋て、紀友則か子助則か哥。／

490

一 するかなるたこの浦波た、ぬ日はあれとも君を恋ぬ日はなし／

二条の后を恋て、御兄の昭宣公のわりなくよまれし也。／
 一 ゆふつくひさすやおかへの松のはのいつともわかぬ恋もするかな（23ウ）

暮る日の山（やま）か、るやか、らざるを云也。七条の中宮の御哥。／

- 491 一 足引の山下水の木隠てたきつ心をせきそかねつる／
 染殿の内侍を恋しく思ひて、たいらの定文か哥也。／
- 492 一 よし野川いはきりとをく行水(マヤ)を哥は、定文か妹の哥。／
- 493 一 瀧津瀬のなかにもよとはありてふの哥、紀貫之か哥也。／
- 494 一 山たかみ下行水の哥は、貞隆の親王、行平か娘を恋てよみ給ふ。／
- 495 一 おもひ出るときはの山のいはつ、しいはねはこそあれ恋しき物を／
 二条の後さとおはします時、清和にみてたてまつる里とは、(24オ) 長良郷(マヤ)の家也。東宮の女御時也。／
- 498 一 わかその、梅のはつえに鶯のねになきぬへき恋もする哉／
 うめのつほみとあるもあり。末枝(ハツエ)如此し。はつえ同事也。／つほめる枝をいへり。文集云、早心如瀧水連ナリ
- 496 一 倭代争カ／得ヲ三万世。此哥、三条の中宮の御哥也。／
 一人しれす思へはくるし紅のすゑ摘花の色に出なむ／
 昭宣公忠平の御歌也。すゑつむと云は、紅のすゑをつむ也。／朱云、追て申す、常盤(イロ)の山の岩槐(マヤ)は、或本ニ云、
 高光の(24ウ) 少将、九条の大臣師輔の御子にて時めきたりし、淳和の御子ニ惟仁親王ニつかへて有しか、
 御子ニ道連て世を遁／て大和国多武峯ニ有時ニ、七ツに成り給娘君の許より恋／しきよし語りつかはし給ふ、
 御返事によめり。此哥は恋の／部にはいか、。／
- 497 一 秋の野の尾花にましりさく花の色にや恋んあふ(マヤ)／
 思草也。をみなへしを云也。惟喬親王の御哥也。／
- 499 一 足引の山時鳥の哥は、七条宮を貫之恋てよむとなん。(25オ)

- 506 一 人しれぬ思やなそとあしかきのまちかけれともあふよしのなき
伊勢と行平も同孝光^(マヤ)天王^(マヤ)つかへしに、いせかよみて／行平の許へつかはす。あしかきのませかきは、蘆は
ほそくてなら／ふるまちかき故也。をなしことく立ならひすめともあはぬ心也。／
- 505 一 あさちふのを野、しのはら哥は、延喜三年昭宣公八幡^(マヤ)／
まいられしに、定国大将の妹見奉てよめり。／
- 504 一 我かこひを人しるしめやしき妙の枕のみこそしらはしるらめ
寛平の御哥合に法王の御哥也。」(26才)
- 503 502 一 一 思ふにはしのふる事そまけにける色^(マヤ)は出しとおもひし物を
二条の后を恋て、業平かよめる。伊勢物語にあふにしかへは／と有か、それを貫之か書かへなをすと云。人
丸の哥^(マヤ)、わか／恋は人いにはなむとおもへともあふにしかへはさもあらはあれ／此哥^(マヤ)末の句おなしき故^(マヤ)、
又、色には出し思ひし物と有本も有。いかん。／
- 501 一 恋せしとみたらし川にせしみそき哥は、業平、二条後の
隠てみえたまはさりしかは、恋せしと云まつりせんとて、／吉備の大明と云陰陽師をめして、賀茂の川原^(マヤ)
て／たいものまつりをしける也。されとも、弥恋しくて此哥をよむ也。／たいもの祭り^(マヤ)と云は、男女の中を
はなつ祭也。みそきなり。」(25ウ)
- 500 一 夏なればやとにふすふるかやり火のいつまでわか身下もえせん
すみよしの神主津守の宣基か娘を恋て、道行の大将のよみてつかはされし也。／

- 507 一 おもふとも恋ふともあわん物なれや 昭宣公^ス姫の許に遣はず。／
- 508 一 いて我を人なとかめそおほ舟のゆたのたゆだに物思ふ比そ」(26ウ)
- 小野小町を恋て、平の中興かよめり。朱云、ゆたのたゆだ／とは、七種の大事あり。舟に入たる水を湯と云。湯まり／たる也。やるかたもなしと恋しき物を云也。六種別伝^ニあり。／
- 509 一 伊勢のうみにつりするあまの哥は、忠仁公、五条の后を恋て／
よみ侍る。五条后、冬嗣の御娘^{ズイコ}順子、仁明后、忠仁か姉也。／
- 510 一 いせのうみのあまの釣繩^{ツリヒコ}うちはへて哥は、貞元親王よみて、／
もとやすの親王の御むすめ連子の内親王^ニたてまつる。／
- 511 一 涙川なにななかみをたつねけん物思ふ時の我身成けり」(27オ)
陽成院の御哥也。紀淑望^{スモチ}かむすめを心かけてよみ給ふ。／
- 512 一 たねしあれはいはにも松はおいにける^(マ)こひをし恋はあはさらめやも／
忠仁公の御哥也。良平郷^(マ)のむすめに心かけて。／
- 513 一 あさな／たつ川霧の空にのみうきて思ひのある世成けり／
紀良宗か備前守にて京へのほりけるに、はりまの賀古川／にて水出たりければやすらふ程に、霧立ていつちも／みえぬに、女のむかひより渡りける。心にかけてとへは、六条の／大納言藤原の国基の御むすめと云聞て、思かけて」(27ウ)てつかわしける。良宗は、貫之か兄、紀資之か子也。／
- 514 一 わすらるゝ時しなけれはあしたつの思ひみたれてねをのみそなく／
つねやすの親王の御哥也。日本記云、大和武尊、垂仁天王の／后を恋給ひて咄^ウしけるに、つれなかりければ、

- 524 523 522 521 520 519 518 517 516 515
- 一 思ひやるさかひはるかに成やする哥は、国経する／
かの守にて久しくすみける時、北方よりよみて」(29才) くだす哥也。するかの夢とあり。明法のはかせ／
- 一 人を恋る心はわれにあらねはや哥は、枇杷大臣／
御むすめをこいて、紀良宗かよみて、人つてにたて／まつり給ふ也。／
- 一 行水に数かくよりもはかなきを哥は、二条後の／
うちましましてあひかたかりしかは、業平のよみて／まいらする也。／
- 一 つれもなき人をこふとて哥は、陽成院の御哥なり。／
- 一 こむよにもはやなりなくらんめのみまへ哥は、昭宣公御哥也。」(28ウ) 藤原長朝かむすめのよみてつかはす。也。忍び文しのふと也。／
- 一 しのふれはくるしき物を人しれす 大江千里かもとへ、／
紀定文かむすめをこひて、橘の忠幹かよめり。／
- 一 人の身もならはし物をあはすしていさ心みん恋やしぬると
伊勢か家の哥合によみ侍る、藤原良門か哥也。／
- 一 宵に枕さためむかたもなし哥は、延喜後の御哥。／
恋しきにいのちをかふる物ならはしにはやすくそ有へかりける／
- 一 唐衣日も夕暮に成る時は哥は、橘の長盛か哥也。」(28才) て雲に入て失けり。日本武尊は、仲哀天皇の御父、景行天皇也。此心哥あり。／
- 一 いきなからに／しろき鶴と成て空に鳴渡りて、終に、后南殿にいて／給ふ御時、おりて羽のうへにのせ奉り

- 仲原晴時かむすめ也。／
- 525 一 夢のうちにあひみんことをたのみつ、くらせるよひはねんかたもなし／
- 忠仁公御哥也。是は、するかへ返しをむすめかかはりて。／
- 526 一 恋しねとするわさならし烏羽玉のよるは哥、業平、／
- 一 宇佐の勅使くたりて、二条の後の恋しかりてつかはす。／業平のほかのみちにて行あひてつかわす也。／
- 527 一 涙川枕なかる、うきねには夢もさたかにみえずそ有ける(29ウ)
- 大中臣頼基か娘を恋て、平のなかおきかよめり。／
- 528 一 恋すれは我身はかけとなりにけり哥は、大江の忠経か哥也。／
- 530 一 篝火のかけとなる身のわひしきは哥は、融大臣(ママ)の歌。／
- 御娘をそつの内侍を、九条大臣師輔恋てよめる也。／或説マは、九条大将常行の哥となんつたへたり。／
- 532 一 おきへにもよらぬ玉もの波の上にみたれてのみや恋わたるらん／
- 伊勢か光孝ニおもはれ奉りてあはさりし時、行平よむ也。／
- 533 一 蘆鴨のさわく入江の白波の哥は、ありつねか哥也。(30オ)
- 534 一 人しれぬ思ひをつねにするかなる富士の山こそ我身也けれ／
- 壬生忠峯か、北山の伯母のありしを恋てよめる也。／
- 536 一 相坂のゆふつけ鳥も我かことく哥は、四条后を／
- 恋て、在原の仲平かよみて遣しけり。仲平は業平か兄。／
- 535 一 飛鳥のこゑも聞えぬおく山の哥は、宇多院御哥也。／

- 548 一 秋の田のほのうへ照すいなつまのひかりの間にも忘れわする、」(31ウ)
- 547 一 秋の田の穂にこそ人を恋さしめ(マ)の哥は、橘の広道か、宗冬か
娘を恋てよみてつかはしければ、返しもあり。ほにいて、なひ／かんとやは秋の田のかりにも人にあかれも
やせむ／
- 546 一 いつとても恋しからずはあらねとも哥は、藤原良房卿御哥也。／
- 545 一 夕されはいと、ひかたき我袖に哥は、宰相清経入道か哥也。／
法名蓮寂と申す。昭宣公の弟也。／
- 544 一 夏虫の身を徒になす事も一思ひによりて成けり」(31オ)
小野小町を恋て、大江惟章(ワ)かよめり。／
- 543 一 明たては蟬のおりはへ鳴暮し哥は、延喜の御哥合に／
后よませ給ひしなり。おりはへては、をりを得てと云也／とかけり。おりをえたる也。／
- 541 一 許へつかはしける。行平の妻と成れり。染殿内侍の母也。／
- 540 一 よそにして恋ふれはくるしの哥は、行平よみて、能相の娘の
心かへする物にもかかた恋は哥は、昭宣公の哥なり。／
- 539 一 うち侘てよは、む声に山彦の哥は、藤原公俊か哥也。／
わひてよみ給へる。基康の親王あそはしつかわさる也。」(30ウ)
- 538 一 浮草の上はしけれる測なれや哥、貞国親王御娘を／
- 537 一 逢坂の関になかる、いはし水いはて哥は、大伴清光(カ)か哥也。／

549

一人目もるわれかはあやな花薄などか穂にいて、恋すしもあらぬ^(ママ)／

朱雀院春宮の御時、望^シ親王、御娘を心かけて哥也。／文集云、苑雀^{エンシヤク}二丈之薄花^{スキ}連迷^ニ後心^ヲ云り。／文、心は、

苑雀野^ニ行テ死タル。男の妻珠か尋テ行程^{アツ}に、／苑雀か屍^{カネ}よりおいとをるす、きかまねきしより、薄／をま

ねく袖と語り。或説^ニは、苑雀^{エンシヤク}は妻、妻珠夫也。／

一 淡雪のたまればがてに碎つ、哥は、貫之か哥なり。／

朱云、淡雪のたまれるはがてにと言は、たまればかつくと^(32オ)たけつ^(く脱か)、と言心也。雪のたまると言は、

かつほろくと^{かすきを碎つ}、と言心也。／

551

一 奥山のすかのねしのき降雪のけぬとかいはむ恋のしけきに

すかのね雪もたまらねはと也。菅^ツの根也。染殿内侍哥也。／

古今和歌集卷第十二 相伝秘要蜜勘抄／

恋哥二／

552

一 思ひつ、ぬれはや人のみえつらむ夢^(ママ)知せは覚さらましを／

一 うた、ねに恋しき人をみてしより夢てふ物はたのみそめてき^(32ウ)／

一 いとせめて恋しき時は烏羽玉の夜の衣をかへしてそきる／

小野小町、業平にす、められて、かれく^{ママ}に成る時よむ。けす^{ママ}うた、ねの哥、陽成院御時、芹川の十首哥

合によむ。いとせめての哥、小町か哥也。夜の衣をかへすと言事は、文集云、顔女恋^ニ亡夫^ヲ返^夜。衣^ニ待^ツ

夢契^{スナキキ}少^一。文心は、秦の始皇の代に清青^{セイキョウ}ト云人有。女を思て有しか、他国へ行て死に、女深歎しかは、

夫夢にみへて云ク、夜の衣を返して北枕にねて左右の手を胸に納めよと言。女そのをし^(33オ)へのこ

554

553

- 573 一 夜とともになかれてそゆく涙川の哥は、伊勢を恋て、／
- 571 一 恋しきにわひてたましゐまとひなはむなしきからの名にやのこらん
きよともかむすめを恋て、藤原の良親か読る也。／
- 568 一 しぬるいのちいきもやすると心みに玉の緒斗あはんといはなん
聖武天皇よませ給ふ。是、光明夫人を思ふり也。^(ママ)／
- 570 一 わりなくもねても覚ても恋しきは哥、八条の出雲
と云おほうちにつかふまつる女也。行基か娘也。」(34オ)
- 582 一 秋なれは山とよむまてなく鹿の我おとらめや独ぬる夜は
是貞親王の御息所の御哥也。不慮外忍ひ家に籠り／給ふ時、春までふりゆかんと風聞の事をかなしみて。／
- 566 ^(ママ) 一 かきくらしふる白雪の下消に哥、当家は、かきくらしを
本とする也。壬生忠岑か哥。／
- 559 ^(ママ) 一 住の江のきしによる波よるさへや夢の通路人めよくらん」(33ウ)
- 558 一 恋わひて打ぬる中に行かよふ夢のた、ちはうつ、ならなむ
も行死／たりし也。ことわざと言は、説法せん事也。真静法師、三井寺法師也。／
- (556) 555 一 とくするに、たかわす夢に見えし也。夫と夜毎逢事、現のことし。是ヨリ言也。此哥、小町哥也。／
秋風の身にさむければ難面人^{ツレキナキ}をそ頼むくる、夜毎に
素性、遍昭か家にて哥合によめる。人のわさしけると言は、死して薨ズル言也。山階大将恒行の二男と

源正隆かよめる哥也。／

一 夢路にも露やをくらん終夜哥、延喜の御門の御哥也。／

一 ねに鳴てひちにしかともはるさめにぬれにし袖と問はこたへむ」(34ウ)

寛平十四年卯月_二嚴嶋の臨時の祭の時、舞の勅使に下／しに、かの舞姫の内侍、神主兵部の大夫さいきの広
／氏かむすめを恋て、千里かよめる也。／

一 虫のこと声にたて、はなかね共涙のみこそしたになかるれ／

是貞親王すみよしへ御出有しに、御息所をみたて／まつり給ひてよめり。昭宣公第七のむすめ。／

一 秋の野にみたれて咲る花の色の千種に物を思ふ頃哉／

延喜御門御子安子内親王を恋てよめる。貫之か哥也。」(35オ)

一 やよひはかりに、物た、ひける人のもとへ、又人まかりつ、／

せうそこすとき、て、つかはしける。露ならぬ心を花にを／きそめて風吹ことに物思ひそつく 躬恒か娘の
美作／のすけにあひて物いひそめし時也。又ひとりまかりつ、／消息すと聞えてと云は、清原元任かかよふ
と聞を／言也。元任は深養父か弟也。／

一 我か恋に暗部の山のさくら花まなくちるともかすはまさらし／

行平の娘白川娘を恋奉りて、是則かよめり。／

一 夏むし_(マ)何かいひけん心から我も思ひにもえぬへらなり」(35ウ)

左近衛佐藤原敏方、但馬守にて行あひてつれてきたりて／侍りしに、敏方かむすめほのみて恋てつかはしけ
る、躬恒／か哥也。返し、身をすて、おもふ時かはいかてかは人に心のとけさらめかも／終あひて忍ひく

574

577

581

583

589

590

600

- 619 一 よるへなみ身をこそとをくへたてつれ哥は、業平マ既にて／
- 618 一 つれくマのなかめにまさるなみた川哥、業平マ」(37オ)
 の朝臣の家なり。女は、いもうとの初草の姫也。敏行か妻也。あさみマとり袖はひつらめ涙川身さへマ／きか
 はたのまん はつ草女か返したり。／
- 617 一 つれくマのなかめにまさるなみた川哥、業平マ」(37オ)
 の朝臣の家なり。女は、いもうとの初草の姫也。敏行か妻也。あさみマとり袖はひつらめ涙川身さへマ／きか
 はたのまん はつ草女か返したり。／
- 616 恋哥三 やよひのついたちよりしのひに／
 人にものらいひて、のちに雨のそほふり」(36ウ) けるに、読てつかわしける。朔日に人の物いふと／云は、
 二条后、春宮の女御にて西の台にまし／ましける也。をきもせずねもせてよるをあ／かしては春のものとて
 なかめくらしつ／おくへきひるはなけき、ねぬへき夜は恋し／きにねられすと也。そほふるは、雨のすこし
 ／ふる心也。又、そよふる也。業平マよるんてつかはしける。／
- 610 一 梓弓ひけはもとすゑ我かたによるこそまされ恋の心は／
 あつさ弓はあまたの義あり。一二ハ、みちのくにあつさ／の郡につくる弓也。一二ハ、あつさの木にて作也。
 ／一二ハ、みこの口よする弓也。まことにはあつさの木／に定るなり。／
- 605 一 てもふれて月日へにけるしらま弓おきふしよりはマいこそねられね／
 をなし人の哥也。」(36オ)
- 604 一 津の国の難波の蘆のめもはるに哥、延喜七ノ宮を／
 恋て、貫之よみて送り奉り給ひ、終に此事とけにけり。／
 てもふれて月日へにけるしらま弓おきふしよりはマいこそねられね／
 をなし人の哥也。」(36オ)

葛葉羅殿真雅僧正の御弟子にて十六ノ年まで／すみけるに、僧正片時も離ることなし。于時淳和天皇／召てつかはさりしに、僧正よみて給ふ哥也。よるへなみとは、／内裏なればよるへき方もなしと云心也。朱云、よるへなみとは、／縁なくてよるかたもなしと云心也。されは、後撰集云、鳴」(37ウ) 洞よしいたされし舟よりも我そよるへもなき心ちする／数ならぬ身は、うき草なりな、む。つれなき人よるへしられし。／徒に行ては来ぬる物ゆへにみまくほしさにいさなはれつ、／

620 業平しけくかよふとて、后のあに昭宣公の許へかくし奉りて／ありしに、あはぬ物ゆへに行てはかへり又かへりて行／くを、二条の後の許へ忍て奉るける哥ぞ。／

621 一 あはぬ夜のふる白雪とつもりなは我さへ友にけぬへきものを／文武天皇の后を犯て、上総国へなかせられしける、人丸か哥也。／

622 一 秋の野に篠わけしあさの袖よりもあわてこし夜そひちまさりける」(38オ)

一 あさの袖は、朝の袖也。大和物語の事を引てよめる也。桜／田の利名の中将、河内国なる女にかよへとも、あはて／朝の袖のみ滋てかへりし事を思ひ出て、よみ侍る也。業平。／

625 一 晨明のつれなくみえし別より暁斗うき物はなし／

一 忠峯いまた延喜の御門にもつかへすして、和泉大将貞国／の許ありし比、貞国、暁の恋と言心をよめと言て／帰りぬ。忠峯よみ侍りける。此哥は名哥なる故に、／やかて和哥所ノ衆とせり。住吉明神の利性也。」

(38ウ)

626 逢ことこのなきさにしよる浪なれば哥は、元方津の守と成て／

東国の時西の宮にて参りあひたりし女を恋て、又行多／をたつぬれば、左大臣源常行卿の御娘と聞て、よみ

- 644 一 ぬぬる夜の夢をはかなみまどろめはいやはかなにも成まさる哉／
- 642 一 玉匣(昔の誤か)あけなは君か名たちぬへみよふかくこしを／
人みけんかも 延喜の東宮にてよませ給ふ哥也。／
- 641 一 郭公夢かうつゝか朝露のおきてわかれしあかつきのこえ／
仁明天皇の大嘗会に業平既にて物みけるを恋て／けるか、東寺の辺にて一度あひ侍りける。暁に郭公／なく
を聞てよめる。醍醐法し定海の哥なり。真如／親王の御子也。業平かいとこなり。」(40オ)
- 638 一 あけぬとていまはの心つくからになといひしらぬ思ひそふらん／
二条の後ニしのひてまいりし時、暁よめる。としゆき。／
- 633 632 一 人しれぬ我かよひちの関守は宵ニ／ことに打もねな、ん／
しのふれと恋しき時は足引の山より月のいて、こそくれ」(39ウ)
- 一 中納言藤原の利基か娘を一夜めしてかへらむとしけるに、／文徳天皇あそはしけるとなん。／
- 627 一 かねてより風に先たつ浪なれやあふ事なきにまたきたつらん／
大友の家持かむすめ、ならひなき美人也。文武おほし召／けるを、柿本躬都良恋て通ふと名を立て、／石見の国へなかされける時、よみて王に奉りける／哥也。ひんかしの五条あたりに人をしりてと言は、／ひかしの五条は長良中納言の家也。かれに二条の後の／おはしけるに、業平忍／にかよふと聞へける也。／
- てつ／かはす也。終本意とけてあひぬ。かの腹に御子二人／あり。左大臣藤原の雅俊、中納言雅忠等也。実には元方／子なし。此女房は経行大将妻なるによりて、おもてに／付て常行の子とす。雅俊名をあらためて、朝行と言。／経行大将北方しのひ／かよひ給ひてけると也。」(39オ)

- 一人にあひて朝につかはすと言は、小野小町にはしめて／相し也。業平□三年也。都北山にて也。／業平伊勢の国(マ)まかりたりける時、青宮(マ)なりける人ニ／いとみそかにあひて、又のあしたにひとやるすへなくて／おもひをりける。(四)に、女の許よりおこしたりける哥。／是はかりの使と言也。太神宮にたか狩をして神供に(マ)みなる御使也。斎宮成ける人と言事は、清和天皇の「(40ウ) 妹、呂子内親也。斎宮の哥也。／
 一 君やこし我やゆきけむおもほえず夢か現かねてかさめてか／
 返し 業平／
 一 かさくらす心のやみにまとひにき夢うつ、とは世人さためよ／
 一 烏羽玉の闇の現はさたかなる夢にいくらもまさらさりけり／
 一 ありつねかむすめを恋て、貞元親王のよみ給へり。／
 一 さよふけてあまのと渡る月影にあかすも君をあひみつる哉／
 一 朱雀院の御哥也。仙洞にやき子と言女を心にかけて給／て／
 一 君か名も我名もた、し難波なるみつともいふなあひみともいはし(マ)／
 一 天智天皇の近江の采女と妻たひける哥也。」(41オ)
 一 名とり河瀬々のむもれ木あらはれていかにせんとかあひみそめけん／
 一 染殿の后を恋て、ある事によりて東国へなかされて、金／青鬼と成て取奉る程に、后うせ給へる／
 一 吉野川水の心はやくとも瀧のをとにはたてしと思ふ／
 一 二条の後の御哥也。／
 一 恋しくは下におもへ紫のねすりの衣色にいつな夢／

652

651

650

649

648

647

646

645

- 671 一 風ふけは波うつきしの松なれやねにあらはれてなきぬへら也
 さたけの直我と染殿内侍を恋奉りて、よめるなり。／
- 669 一 大かたは我名もみなときいてなむ世を海へたにみるめすくなし
 平城の御孫源の融の御むすめをおもはせ給ひて哥。／
- 664 一 山しなのをとほの山の音にたに哥は、近江の采女の
 天智天皇を恋たてまつりてよみて奉る哥也。／
- 660 一 瀧津瀬のはやき心をなにしかもひとめつ、みの関と、むらん
 北野へまうてつる時、物見車のと、ろくをみれば、女車也。」(42オ) 河原_二侍りみるに七条の后也。やかて
 恋て、貫之つかはす哥也。／
- 659 一 思へとも人めつ、みのたかければ川と見なからえこそ渡らね
 藤原の忠房か哥也。／
- 658 657 656 一 夢路には足もやすますかよへともうつ、に一日_(マ)みしことはあらず
 大江の惟章か許へつかはしける、小町か哥也。／
- 653 一 花す、きほにいて、恋は名をおしみ下結びものむすほ、れつ、」(41ウ)
 四条の后を恋て読けるなり。女の許よりおこせたりけるとは、たいらの中興かむすめ也。／
- 一 現にはさきもこそあらめの哥、業平、小町を恋て読る。／
- 一 限なき思ひのま、によるもこむ夢路をさへに人はとかめし／

676 しるといへは枕たにせてねし物をちりならぬ名の空にたへなん(マ)／

伊勢、一夜忠房ちきりて、やかてかくれなし。／伊勢かよむ。」(42ウ)

古今和譚集卷第十四 相伝秘要蜜勘抄／

恋哥四 よみ人しらす／

677 一 陸奥の浅香の沼の花かつみかつみつる人に恋や渡らん／

在原の業平かむすめを恋て、しのひくにあふてよめり。／在原の基平か哥。行平の一男也。／

678 一 あひみすは恋しきこともなからましをとには人をきくへかりける／

すけの内侍にあひてみつねか哥也。／

682 一 石間行水の白波立かへり哥は、業平を恋て、二条の／

后よみて送り給ふ哥也。」(43オ)

683 一 伊勢の海士の朝な夕なにかつくてふ哥は、宇多の／

御哥也。／

688 一 思ふてふこと(マ)の葉のみや秋をへて色もかはらぬ物にそ有ける／

是貞の親王の御哥也。／

692 一 月夜よし夜よしと人につけやははこてふにたりまたすしもあらず／

すけの内侍の許へ常康親王のこむとて来さりければ、／よみて恨みやりけり。／

696 一 津の国の難波おもはず山城のとはにあひみんことをのみこそ／

すけの内侍か哥也。」(43ウ)

- 697 一 敷嶋の大和にはあらぬから衣比もへすしてあふよしも哉／
 とうい・なんばん・せいしう・ほくてき、四人の將軍、よつの城を／かまへて有り。故に、四城嶋と言也。
- 699 一 城と言字をきとよむ。／此哥は、七ノ宮を恋て貫之かよむ也。／
- 701 一 みよし野、おほかはのへの藤波のなみにおもは、我恋めやは／
 一 あまの原ふみと、ろかしなる神も思ふ中をはさけしとそおもふ／
 一 さくるは、さまたくる心也。紀乳母の哥也。陽成院／の御乳母也。／
- 702 一 梓弓ひきの、つゝらすゑつゐに我思ふ人にことのしけけん」(44オ)
 一 しけ、むは、相ことのしけるれ也。基房の哥也。／
- 703 一 夏引の手引の糸をくり返しことしけくともたえんとおもふな／
 一 あめの御門と言は、天智天皇御事也。あふみの采女ニたふ哥也。／采女は、終に御門を恨て、猿沢の池の玉藻とよめり。／かの池に身を投て死しには、ねくたれかみ玉藻となれり／と言。朱言、梓弓アボクの哥にことのしけ、むとは、諍論口／舌をいひならはしたり。引野の名所つゝらも、さて／引野のつゝらと言と也。たかまママの野へにはふくすの／すゑ終に千世の返マタにわすれん我大君も すゑ終には、」(44ウ) 後つゐニ也。／
- 706 一 おほぬさの引手あまたになりぬれと言哥、二条后御哥也。／
 一 業平のひとかたならぬを恨みよませ給へる也。帛也。／
- 707 一 おほぬさとなにこそたてれなかれてもつゐによるせは有てふ物を／
 一 業平御返しを申たりき。／
- 708 一 すまのあまの塩やく煙風をいたみおもはぬかたに棚引にけり／

- 清和の御むすめに選子内親王と申し人なり。されは、清和の／籠居を訪奉るやうにて、申初て、しのひく／にかよひ／けるか、此人、さかの天皇の御子基陰親王モトカケつれて須磨に／住給ひしに、本よりなりひらの許へつかわす哥也。煙とは」(45才) 恋を言、風とは夫を言也。もとかけ風をいたみておもはぬ／方のすまにすみたる事よせは、かくうつふしなる事かなと読り。／
- 709 一 玉かつらはふ木あまたに成ぬれば絶ぬ心のうれしけもなし／
一 (?) 一かたならぬかよふ人のあれは、常に問たこと(マ)の葉も嬉／しけになしとよめり。此は、伊勢光孝親王の行平／等のかよふとき、て、うらみてよめる也。橘の長盛／か哥也。伊勢か物(マ)の夫にてありしかは、かくよみて侍りけり。／
- 710 一 誰里によかれをしてか時鳥たゝこ、にしもねたる声する／
一 染殿の内侍か重明親王に相てかへり、こよひはいかなる／人に逢たりけるそと、(マ) 帰りて夫言ければ、平の定平」(45ウ) かねなからによめる哥也。定文は内侍か夫也。／
- 712 一 偽のなき世なりせはいかはかり人のこと(マ)の葉哥は、延喜／の御哥也。／
- 720 一 たえず行飛鳥の川のとみなは心ありとや人のおもはん／
一 おほなかとみの棟(マ)に人の名のりの哥也。／
- 721 一 淀川のとむと人はみるらめと哥は、惟喬親王御哥也。／
一 はつ草の女房を恋てよみ給ふ也。／
- 723 一 くれなひのはつ染(マ)の色ふかく思ひし心われ忘れめや／

- 725 一 染殿の後、文徳天皇の恋しく思ひてよませ給ふ哥也。／
 おもふよりいかにせよとか秋風になひく浅茅の色ことになる」(46才)
 多^(マ)出子^(マ)をなりひら恋てよませ給ふ哥。／
- 730 一 めつらしき人をみるとや^(マ)しるもせぬ哥は、業平の哥。／
 一 かけろふのそれかあらぬかの哥は、貞平親王の御哥也。／
 ほり江のたな、し小舟は、行平かむすめの哥也。／
 わたつみとあれにしとこをいまさらに哥は、伊勢、七条の
 (マ) (マ)
- 733 中宮にをくれまいらせて、出家して如法房と／言て桂の里にすみし時、延喜の御時題を贈給ふ哥也。／又、
 732 一 むかしへと言事は、むかしにたちかへると言心也。」(46ウ) 右のまうち君とは、大夫也。近院の右大臣源の
 (マ) 能有の／御事也。内侍の夫也。因^(マ)香也。／
 (マ) (マ)
- 739 一 まてといは、ねてもゆかなむ忍ひ行駒のあしおれまへのたなはし／
 大江の玉溯かむすめのよめる哥也。たな橋は板打渡す也。／
- 740 一 あふ坂の夕付鳥にあらはこそ君行きをなくくもみめ／
 のほるは、とほるの大臣の子也。閑院と言は、かの妻也。／顕景の大将のむすめなり。／
- 742 一 山賤のかきほにはへる青つ、ら人はくれともことつてもなし」(47才)
 かきのおもてなり。寵はうつくしとなんよむ／流もあり。当流にはた、ちようとよむへき也。／
- 744 一 あふまての形見も我はなにせんとみて^(マ)も心のなくさまなくに／
 おやのまもりける人とは、平の定文かむすめ也。／関白貞信公御子とみの小路右大臣顕忠卿を／聳にとらん

745

とて、こと振舞をせさせしとするを言也。□れ／ともなりひらか哥。／

一 あふまての形見とてこそと、めけめ涙にうかふもくつ成けり」(47ウ)

興風かよみて送りけり。返し。／

746

一 形見こそいまはあたなれはなくはわする、時もあらまし物を／

二条后、なりひらのもとへよみてつかはし給ふ也。／されは、なかされし時、てなれたるくろ木の／す、を

后へ奉りて、我ともなりなは後世とふらひて／と言心をおしはかりて、后はあけ暮の涙なり。」(48オ)

(本学教授)

(本学研修者)